

枯れ枝や割りばしなど、身近にあるものが燃料になる「ロケットストーブ」の普及活動を紀の川市の神徳政幸さん（写真下）が行っている。「土台はエンジンオイルの空き缶。非常時に家族や周りの人を助けてくれるコンロを備え、災害への心構えをしてほしい」と呼びかける。

1980年代にアメリカで開発されたロケットストーブ。身近に手に入るものを燃料として使い、ライフラインが途絶えた現場で利用できることから、災害時のコンロとして日本でも注目を集めている。

身近なものを燃料に



空き缶の中に連結させたステンレス煙突をはめ込み、缶と煙突のすき間に断熱材を入れる。たき口が水平のため、上部にある断熱された煙突内で燃焼ガスが膨張して上昇気流を生み、効率良く高温を維持できる。完成まで2時間半程度だ。

主義」を読んでロケットストーブを知り、独学で作る方を身につけた。3年前から同市のふる博で製作体験会を実施しており、これまでに100人が参加した。

材料はホームセンターなどで購入できる、スチール製20Lの空き缶2個と3種類のステンレス煙突、断熱材、ネジ。上下につなげた

神徳さん（0736・662955）。

紀の川市の神徳政幸さん 空き缶コンロ広める

紀の川市職員のかたわら、日本災害救援活動士として活動する神徳さんは、藻谷浩介さんの「里山資本